英語の動名詞構文

後藤善久

1．はじめに

英語の動名詞構文は、V-ing の目的語に付与される格の違いと、V-ing の意味上の主語に相当する名詞（主語名詞）に付与される格の違い（所有格あるいは対格）の観点から、以下の 3 種類に分類される。

(1) a. [Mary's performing of the song] surprised everybody. (ing-of)
b. [Mary's performing the song] surprised everybody. (Poss-ing)
c. [Mary performing the song] surprised everybody. (Acc-ing)

(1a) の ing-of 動名詞では、名詞素性［+ N］をもつ -ing が V に付加することによって V が名詞化（nominalization）し、目的語に格を付与する動詞としての性質を失うために、*of* の挿入が必要になるという説明が一般的である。この ing-of の分析が広く受け入れられている一方、Poss-ing と Acc-ing の派生に関しては様々な点で議論の余地が残されている。

本稿では、-ing の素性および -ing が結合（Merge）される統語的位置に関して新しい提案を行う。以下、第 2 節では、Abney (1987) の主張と Miller (2002) の主張を考察し、それぞれの分析の問題点を指摘してから、-ing の素性に関する新たな分析を提示する。第 3 節では、本稿の分析を裏付ける証拠として、動名詞が (1) で例示した 3 種類にもう 1 種類加えられた 4 種類に分類される共時的事実と、動名詞と現在分詞との融合に関する通時的事実をそれぞれ提示する。最終節（第 4 節）では、名詞的［+N］動名詞と動詞的［−N］動名詞がそれぞれどのような認可を受けるのかについて考察し、本稿の新しい

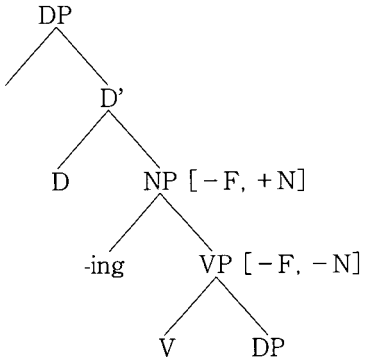
提案に従えば試験的ではあるが記述的妥当性の高い分析が可能であることを示す。

2．-ing の素性と統語的位置

2.1.　Abney（1987）の分析

Abney は -ing が［+N］の素性をもち、-ing が接辞（affix）として付加される位置が異なることにより 3 種類の動名詞が生成されると主張している。ing-of 動名詞の場合は、前節で述べた分析と同じように -ing が V に付加し、ing の素性である［+N］が V の素性である［+V］に優先するため V-ing の範疇は N（名詞）となる。Poss-ing の場合、-ing は VP に付加する。この操作によって（2）のような構造が生成される。

(2)

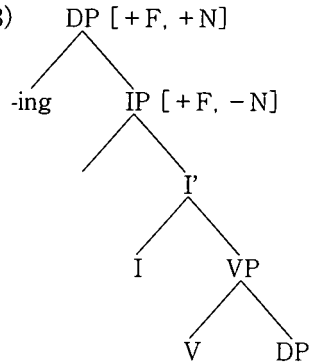


VP の主要部 V は語彙範疇に属するので［−F］の素性をもち、V の投射である VP は［−F, −N］の素性を V から受け継ぐ。-ing の［+N］素性が VP の［−N］に優先すると仮定されていることから、-ing が VP に付加すると［−F, +N］の素性をもつ投射範疇が生成される。この［−F, +N］の素性を持つ範疇は NP であるから、-ing が VP に付加することによって生成される投射範疇は NP となる。この

ように生成されたNPとDが結合して新しくDPの投射が生成される。主語名詞はこのDPの指定部に位置するために所有格を与えられる。

Acc-ingの場合、-ingは（3）で示されているようにIPに接辞化する。

(3)



IPの主要部Iは語彙範疇ではなく機能範疇に属し［+F］の素性をもつので、Iの最大投射であるIPは［+F, −N］の素性を有している。IPに-ingが付加することによって生成される投射は、ingの［+N］素性がIPの［−N］素性に優先することにより［+F, +N］の素性を与えられる。［+F, +N］の素性をもつ範疇はDPであるから、-ingがIPに付加することによって生成される投射範疇はDPと見なされる。また、対格を付与される主語名詞が位置するのはIPの指定部であると仮定されている。

2.2. Abney（1987）の問題点

ここでAbneyの分析に対して疑問を投げかける問題点を4つ提示する。最初の問題はPoss-ingに関連している。(4) で示したように、Poss-ingは形容詞による修飾を許さない。

(4) a　*my successful baking the clams
　　b　my successfully baking the clams

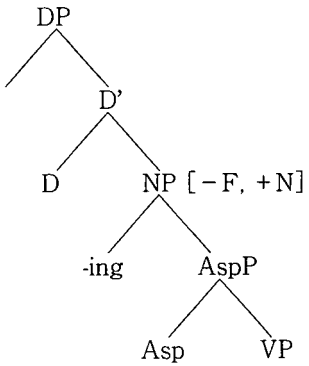
-ing が［＋N］の素性をもち、(2) で示されているように Poss-ing の構造には NP が存在するのであれば、形容詞がその NP を修飾することが可能であると予測され、(4a) の非文法性を説明できないことになる。

2つ目の問題は、相（Aspect）に関係している。下の (5) から明らかなように、-ing は完了時制を表す *have* に接辞化して Poss-ing を生成できる。

(5) my having baked the clams

(5) は (6) の構造を与えられると仮定しよう。

(6)



Abney の主張によると、Poss-ing が生成されるためには［－F］の素性を持つ語彙範疇の投射に -ing が付加しなければならない。従って (6) の構造が文法的であるためには、完了時制の *have* は［－F］素性を持つ語彙範疇でなければならない。しかし、この仮定は時制や相などの意味的役割を担う要素は機能範疇に属すると考える一般的な

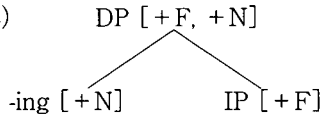
分析と相反する[1)]。

3つ目の問題はAcc-ingに関係している。(3) で示したように、-ingがIPに付加することによってDPが新たに投射されているのがAcc-ingの構造の特徴である。この主張が成立するためには、-ingが付加するための範疇としてIPが投射されていること、さらに、IPの指定部に対格を付与する役割を担う要素がIPの主要部に存在することが必要条件となる。時制節の主要部Iの場合は、音形の有無、すなわち音韻素性の有無に関係なく、統語的かつ意味的に解釈可能(interpretable) な素性をもつ [±past] のような要素がIを構成していると仮定されている[2)]。Abneyは Acc-ingのIに生じる要素として「動詞的 Agr」(a verbal Agr) を仮定している[3)]。しかし、Agrが主要部の役割を担うという主張には議論の余地があり、Chomsky (1995) は Agr 素性は統語と意味のインターフェイスで何の解釈も与えられない「解釈不可能 (uninterpretable) な」主要部であるという理由で、普遍文法 (UG) から Agr を排除することを提案している。また、そもそもなぜ -ing は動詞的 Agr が主要部である IP には接辞化が可能である一方で、[± past] が主要部である時制節の IP には接辞化できないのか説明できない。つまり、(7) のような例文の非文法性が説明できない。

(7) *[Mary performeding the song] surprised everybody.

最後の問題は X-bar 理論に関係している。Abney によると、-ing は VP や IP のような動詞的投射 (a verbal projection) に接辞化し、それらの動詞的投射を名詞化して NP や DP に変える働きをするが、-ing は主要部でも中間投射でも最大投射でもない。Acc-ing の場合、(8) で示されているように、DP は [+N] 素性を -ing から継承し、[+F] 素性を IP から継承しているが、DP の主要部は -ing でも IP でもない。

(8)

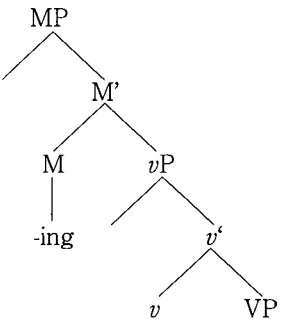


この統語構造はX-bar理論が認可する構造に合致せず、Abneyはこの問題を解決するために、X^0（主要部）やX'（中間投射）やXP（最大投射）のようなX-barレベルは、統語範疇（NやV）、人称（person）、数（number）などと同じように素性であると仮定している。つまり、主要部は［0Bar］、中間投射は［1Bar］、そして最大投射は［2Bar］をそれぞれ素性として与えられると仮定し、-ingは［nBar］のnの指定が特定されていない（unspecified）ために、X-bar理論の適用を受けないと主張している。このようにAbneyは動名詞を説明するために、X-barレベルを素性として扱うこと、そしてX-bar理論の適用から除外される存在を仮定しているが、この仮定を裏付ける他の証拠が提示されない限りにおいては場当たり的な説明であると判断せざるを得ない。

2.3. Miller（2002）の分析

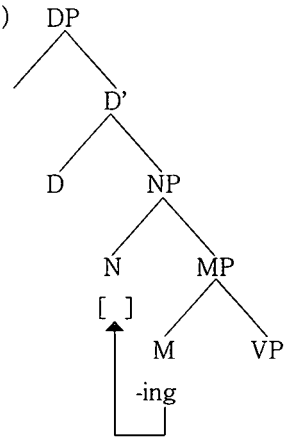
Miller（2002）の分析は2つの点でAbney（1987）の分析と大きく異なる。まず、-ingは（9）で示されたようにMood句（MP）の主要部Mに置かれる。

(9)



第2点目に、Abneyは-ingが［+N］の素性をもつと仮定しているが、Millerは-ingには［+N］か［−N］のどちらかの素性が与えられ、［−N］の素性を与えられた場合にはAcc-ingが生成され、［+N］の場合はPoss-ingが生成されると主張している。-ingが［−N］の素性をもつ場合の構造は（9）のまま変わらず、MPの指定部に移動した名詞に対格が付与されAcc-ingが生成される。一方、ingが［+N］の場合はゼロ派生（zero-derivation）によって（10）で示したようにMPを補部とするNPが投射され、NPの上位にさらにDPが投射された名詞構造が形成される。

(10)



DPの指定部に移動した名詞には所有格が付与されPoss-ingが生成される。

2.4. Miller（2002）の問題点

この節では2.3節で概観したMiller（2002）の分析の問題点を3つ指摘する。1番目の問題はMPの名詞化と関係している。［−N］の素性を与えられた-ingがMの位置を占めるとAcc-ingが生成されるとMillerは主張している。Poss-ingのMPが名詞化されるのとは対

照的に Acc-ing の最大投射である MP は名詞化されないという彼のシステムでは、なぜ Acc-ing は（11）の例文のように Poss-ing と同様に前置詞の補部に生起可能なのかが説明できない。

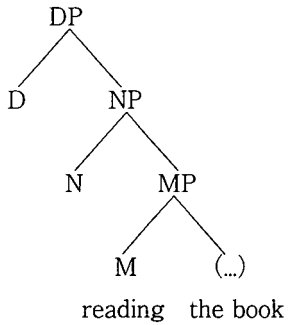
(11) a. Mary talked about [John moving out].
　　 b. Mary talked about [John's moving out].

前置詞の補部は格を付与される位置なので、格付与に関して Acc-ing が名詞的な特性を持っていることを（11a）は示している。

2 番目の問題は 2.2 節の（4）の例文で指摘した Abney（1987）の問題と同じである。Poss-ing の -ing が［+N］の素性を持ち、(10) のように M から N に名詞化されるのであれば、形容詞がゼロ派生された NP を修飾することが可能であると予測され、(4a) の非文法性を説明できないことになる。

3 番目として ing-of 動名詞の派生に関する問題点を指摘する。Miller（2002）では、(12) の構造が ing-of 動名詞に与えられている。

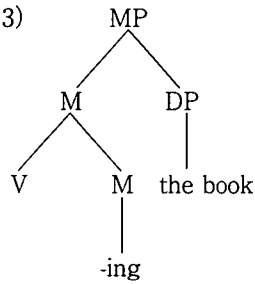
(12)



(12) で、M の補部が括弧として表示され明確にその範疇が示されていないが、2 つの可能性が考えられるであろう。1 つ目は、Acc-ing や Poss-ing と同じように *v*P が M の補部である可能性である。しかし、*v*P が投射されている構造を仮定すると、*v*P は対格を付与する能

力を保持していると予測され、*of* の挿入が義務的である事実が説明できない。2つ目は、V と -ing のそれぞれが単独で主要部の役割を担うのではなく、(13) の構造のように V と -ing が結合して生成された V-ing が M の主要部として MP を投射するという可能性である。

(13)



(13) の構造から明らかなように、DP は V ではなく M の補部に位置していることから、DP は M から何らかの認可を受けなければならない。-ing が V に統語部門で接辞化して生成された主要部 M は、V がもつ θ 役割（あるいは下位範疇化素性）を継承できると仮定することでこの問題は解決可能かもしれない。しかしながら、θ 役割／下位範疇化素性を継承できる一方で、なぜ格付与の能力は継承できないのかなど、この仮定は説得力のある根拠に欠けている。

2.5. -ing の素性と統語的位置に関する新たな分析

上述したように、Abney (1987) は -ing が [+N] の素性をもつと主張しているのに対し、Miller (2002) は N 素性の有無は未指定で、[−N] と [+N] のどちらが選択されるかによって異なる構造をもつ動名詞が生成されると主張している。-ing の N 素性が常にプラスに指定されているのではないと主張する点においては、本稿の主張は Miller (2002) に近い。しかしながら、Miller の主張とは異なり、本稿では N 素性の有無だけで -ing の統語的特性が決定されるのではなく、N 素性に加えムード（法）に関する素性（M 素性）の有無も重

要な役割を果たしていると主張する。より具体的に記述すると、-ing は［－alternatives］を任意に与えられ、(14) で表したように N 素性と M 素性の有無で -ing は 4 つに分類されると主張する。

(14) -ing の素性（未完成版）

a. ［＋N］ : ing-of
b. ［＋N, －alternatives］ : Poss-ing
c. ［－alternatives］ : Acc-ing
d. ［－N, －alternatives］ : ?? -ing

［－alternatives］素性は Egan (2008) の主張を発展させることにより本稿で新しく提案する素性である。下の (15) に記述したように、*to* 不定詞が表す状況の実現性に関しては、それが最も実現可能性が高いけれども絶対ではなく、実現可能性に疑いの余地が残ると Egan は主張している。つまり、描写された状況の代わりに実現する可能性のある（＝［＋alternatives］）状況を *to* 不定詞は含意している。一方、動名詞によって描かれた状況は、その実現可能性に疑いの余地が全く無く（=［－alternatives］)、どこか指定された領域の中で実現しているものとして取り上げられていると Egan は主張している。

(15) a. *to* imfinitive : a situation is profiled as the more/most likely of two or more alternatives in some specified domain.
b. -ing : a situation is profiled as extended in some specified domain.

M 素性に分類される［±alternatives］素性を説明した所で、(14) に焦点を戻そう。(14a) のように -ing が［＋N］素性だけで構成されている場合は、-ing は V に接辞化され、V-ing は N の主要部となり NP を投射し、結果的に最大投射が DP である ing-of 動名詞が生成

される。また、M 素性は付与されていないので主要部 M にはなれない。次に、(14b,c,d) のように -ing が［－alternatives］素性で構成されている場合には、-ing は主要部 M の位置を占め *v*P を補部に選択する。［－alternatives］に加え (14b) のように -ing が［＋N］の素性をもつ場合には、-ing は［＋N］の素性をもつ機能範疇である D と同様に指定部に位置する名詞に対して所有格を付与する。さらに (14c) のように -ing には N 素性も V 素性も付与されず［－alternatives］素性だけで構成されている場合には、Poss-ing の場合とは異なり、指定部に位置する名詞には時制のない不定形の M 素性である［－alternatives］から対格が与えられる。(14d) は［－N］素性と［－alternatives］素性が構成要素であるもう 1 つ別の -ing の存在を予測している。この 4 種類目の -ing については 3.1 節で取り上げる。

上述した新しい分析に従えば、Abney と Miller の分析の反例となっていた (4) の問題を解決できる。彼らの分析とは異なり、本稿の分析によると Poss-ing も Acc-ing も両方とも -ing が主要部 M として *v*P を補部に選択し MP を投射する。従って、Poss-ing には Acc-ing と同じように MP は存在するが NP は存在しないために、NP を修飾する形容詞は正しく排除される。

また、(11) で指摘した Acc-ing が Poss-ing のように前置詞の補部に生起可能である事実についても説明可能である。本稿では時制節や不定詞節は［＋V］素性をもち、前置詞が付与する格と［+V］素性が不適合であるため、時制節や不定詞節は前置詞の補部に生起できないと仮定する。時制節や不定詞節とは対照的に、Acc-ing は (14) で示したように［＋V］素性を与えられていないので前置詞からの格付与が可能であると予測できる。

3．N 素性と M 素性による分析を支持する共時的事実と通時的事実

3.1. 4 種類の -ing

下の (16) の例文が示しているように、主語の位置から外置された

(extraposed) 動名詞は Poss-ing でも Acc-ing でもなく、V-ing の主語が義務的に PRO である動名詞（＝義務的 PRO-ing）でなければならない[4)]。

(16) a. It was a joy [PRO encountering that book in such an out of the way shop].
b. *It was a joy [Susan('s) encountering that book in such an out of the way shop].
c. It confused me [PRO finding the house empty].
d. *It confused the chief [the cops finding the house empty].

Milsark (1988) は外置された位置は付加位置 (adjunct position) なので格付与が不可能であると仮定し、格付与が必要な名詞的動名詞である Poss-ing と Acc-ing の外置は許されないが、一方、義務的 PRO-ing は動詞的で格付与が不必要であるため外置が許されると主張している。Milsark が言及している動詞的動名詞が、まさしく本稿の (14) で予測された 4 種類目の動名詞である (14d) に相当する。[－N] 素性と [－alternatives] 素性を与えられた -ing は義務的 PRO-ing に相当するという主張に従い (14) を完成させると、N 素性と M 素性の有無による -ing の分類は (17) となる。

(17) -ing の素性（完成版）
a. [＋N]　: ing-of
b. [＋N, －alternatives]　: Poss-ing
c. [－alternatives]　: Acc-ing
d. [－N, －alternatives]　: 義務的 PRO-ing

ing-of、Poss-ing、Acc-ing そして義務的 PRO-ing という 4 種類の動名詞が存在していること、そしてそれぞれの動名詞の統語的特性を正しく説明できることが、本稿の N 素性と M 素性の有無による分析に

妥当性を与えてくれるであろう。

3.2. -ing 動名詞と -ing 現在分詞の通時的関係

古期英語から中期英語の前半まで -ing（あるいは -ung）は主に事象名詞（event nominals）の派生に用いられてきた。この機能に加えて、中期英語で -ing 名詞は *of* の挿入なしに目的語を補部に直接とることができる動詞的性質をもつようになったが、その引金と考えられるのが現在分詞 -ende（> ME -ing）との融合である。古期英語の現在分詞 -end(e) が中期英語で -ing に変化し、その影響で -ing 名詞（事象名詞および ing-of 動名詞）が動詞的性質を示すようになり動名詞構文が新しく誕生したという通時的仮説が正しいならば、具体的にどのように -ing 現在分詞が -ing 動名詞の変化を引き起こしたのかという疑問に理論的な説明を与えなければならない。

Miller（2002）で指摘されているように、知覚動詞の補部に生起する -ing 現在分詞によって描かれる出来事は、古期英語においても現代英語と同様に直接観察されていることが含意されている。この事実は下の例文の不定詞補部と現在分詞（-ende）補部との対比から明らかである。

(18) Infinitive and participle complements contrasted (OE)
ðā geseah hē on swefne standan āne hlǽddre fra
then saw he in dream stand a ladder from
eorþan tō heofonan *7* Godes englas upp stīgende…
earth to heaven & God's angels up ascend.PrP
'then he saw in a dream a ladder stretch from earth to heaven and God's angels climbing up'

(18) で *standan* は不定詞で *stīgende* は現在分詞であり、この不定詞と現在分詞の対比によって、知覚の対象がはしごの組み立てではなく昇天している天使であることが暗示されていると Miller は述べて

いる。-ing（-ende）現在分詞が直接の観察を含意していることから、-ing 現在分詞が描写している状況の実現可能性は疑いの余地は全く無い。つまり、-ing 現在分詞は意味素性として［－alternatives］を任意でもつことが可能で、［－alternatives］素性をもつ -ing 現在分詞だけが知覚動詞の補部の位置で認可されると仮定することは妥当であると思われる。-ing 現在分詞が任意で［－alternatives］素性をもつことができるという仮定から、-ing 現在分詞と -ing 動名詞の融合により、-ing 動名詞が［－alternatives］素性を任意でもつことができるように変化したという推論を導くことができるであろう。

このように［－alternatives］という意味素性を仮定することで -ing 動名詞と -ing 現在分詞の通時的関係を具体的に説明することができた。この説明が支持される限りにおいて、3.1 節の共時的事実の説明と同様に、［－alternatives］素性に基づく本稿の分析の妥当性が認められるであろう。

4．動詞的動名詞の認可と T 連鎖

第 4 節では、(17) で提案した N 素性と M 素性に基づく動名詞の分析をさらに発展させて動名詞の認可について論じる。3.1 節で扱った主語の位置から外置された動名詞の他に、Milsark (1988) は (19) で例示したような時間相動詞（verbs of temporal aspect）の補部に生起する動名詞を動詞的動名詞に分類している。

(19) a. Ronald started acknowledging his fascism.
　　 b. Mary began living independently.

Milsark が分析しているように、時間相動詞の補部に生起する動名詞の主語は PRO でなければならない。また、これらの動詞的動名詞を主語にした受動態は非文法的であることから、そもそも能動態であっても補部に選択された動名詞に時間相動詞は格を付与していない

と考えられる。

(20) a. *John started Bill's learning Inuit.
b. *Learning Inuit was started by a number of linguists.
c. *Bill began his playing the Sixth Suite.
d. *(Bill's) playing the Sixth Suite was began twice.

ing-of 動名詞、Poss-ing そして Acc-ing のような名詞的［+N］動名詞が動詞や前置詞から格を付与されることで可視性の条件（visibility condition）を満たすと仮定するならば、時間相動詞の補部に生起する動詞的［−N］動名詞はどのように認可を受けるのであろう。以下、この問題に対して T 連鎖（Tense-chains）による説明を提案する。

（17d）で示したように本稿では動詞的動名詞 -ing は［−N, −alternatives］の素性をもつと主張しているが、動詞的動名詞 -ing は MP の主要部 M としての役割を担うことが可能な他の助動詞（*can* や *must* など）と同様に T によって認可されると仮定する。この仮定に従えば（19b）の例文は下の（21）の構造を与えられ、主節の動詞である時間相動詞 *begin* の補部に現れる -ing は、主節の主要部 T である［+past］と連鎖を形成し同一指標が付与される。

(21) $[_{TP}$ Mary $[_{T}$ $[+past]_i$ $[_{VP}$ $[_{V}$ begin $[_{MP}$ $[_{M}$ -ing_i $[_{VP}$ live ...]]]]]]

動詞的動名詞 -ing が T によって連鎖束縛され同一指標を与えられるという主張により、（22）で示された進行形の -ing と動名詞の -ing が連続する doubl-ing 構文の文法性の違いに説得力のある説明を与えることができる。

(22) a. Bill was enjoying playing the Sixth Suite.
b. *Bill was beginning playing the Sixth Suite.
c. Subj [$_{TP}$ T [$_{AspP}$ -ing [$_{VP}$ begin [$_{MP}$ -ing [$_{VP}$ play the Sixth Suite]]]]]

(22a) の動名詞は主節の動詞 (*enjoy*) の目的語であり、動詞から対格を付与されることで認可される。一方、(22b) の動名詞は動詞的であるため動詞からの格付与が不可能であり、その代わりに動名詞 -ing は主節の T と連鎖を形成しなければならない。しかし、T と M との連鎖の中間に進行相 (Progressive Aspect) に関連する句 (AspP) の主要部である進行形の -ing が位置している。進行形の -ing と動名詞の -ing は形態的に同一であるため、Rizzi (1990) が提案した相対的最小の原理 (Relativized minimality principle) に抵触し、進行形の -ing が T (*was*) と M (動名詞 -ing) との連鎖を妨げる。このため、動詞的動名詞 -ing が T 連鎖を満たすことができず非文法的になる。

以上、本稿では動名詞構文の統語的特性は N (名詞) 素性の有無だけで決定されるのではなく、M (ムード) 素性である [−alternatives] 素性の有無も重要な役割を果たしていると主張した。この主張に基づき、ing-of、Poss-ing、Acc-ing そして義務的 PRO-ing という 4 種類の動名詞の存在とそれぞれの統語的特性を正しく説明できること (3.1 節)、-ing 動名詞と -ing 現在分詞の通時的関係を具体的に説明できること (3.2 節)、そして、進行形の -ing と動名詞の -ing が連続する doubl-ing 構文の文法性の違いを理論的に説明できること (第 4 節) を示した。

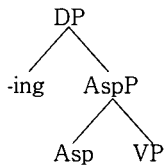
［注］

1）下の例文から明らかなように、完了相の *have* は Acc-ing も生成可能である。

i）I appreciate [you having recommended it].

本文で述べたように AspP が［－F］であれば、-ing が付加することによって生成される投射範疇は NP と見なされ、この NP を補部とする DP の指定部に生じる主語名詞は例外なく所有格を与えられると予測され、Acc-ing の文法性を説明できない。一方、もし AspP が［＋F］であると仮定すると AspP は IP と同じ［＋F, －N］の素性をもつために、ii）の構造から明らかなように生成される投射範疇は主要部 D が存在しない DP であり、今度は Poss-ing の生成が不可能であると誤って予測してしまう。

ii）



この問題を解決するためには、完了相の *have* は機能範疇でも語彙範疇でもない、すなわち F 素性に関してプラス／マイナスの指定がなく、［　F］と表記される未指定の状態であると仮定しなければならない。

2）本稿は Chomsky（1995）のシステムに基づき、語彙項目の語彙特性を記載した語彙記載項（lexical entry）は、音韻素性、意味素性、そして統語的素性の 3 種類の素性から構成されていると仮定する。

3）動詞的 Agr は Poss-ing で所有格を付与する役割を担う「名詞的 Agr」(a nominal Agr）と対比されている。

4）本稿では、「PRO の代わりに語彙的な名詞句が現れることができない」という意味で「義務的」という表現を使っている。外置された動名詞とは対照的に、名詞的動名詞の場合は PRO でも語彙的な名詞でもどちらでも主語名詞として生起可能である。

i）Susan worried about [PRO/John being late for dinner].

また、生成文法で広く採用されている「義務的コントロール」という用語の場合には、PRO の存在が義務的であることに加えて、PRO の先行詞（あるいは、コントローラー）が必ず存在することも含めて「義務的」という表現が使われている。

[参考文献]

Abney, S. 1987. The English Noun Phrase in its Sentential Aspect. PhD dissertation, MIT.

Chomsky, N. 1995. *The Minimalist Program*. Cambridge, MA: MIT Press.

Duffley, P.J. 2006. *The English Gerund-Participle: A Comparison with the Infinitive*. New York, NY: Peter Lang.

Egan, T. 2008. *Non-finite Complementation: A Usage-based Study of Infinitive and -ing Clauses in English*. Amsterdam: Rodopi.

Miller, D.G. 2002. *Nonfinite Structures in Theory and Change*. Oxford: Oxford University Press.

Milsark, G.L. 1988. Singl-*ing*. *Linguistic Inquiry* 19: 611-634.

Rizzi, L. 1990. *Relativized Minimality*. Cambridge, MA: MIT Press.

Yoon, J.H.S. 1996. Nominal Gerund Phrases in English as Phrasal Zero Derivations. *Linguistics* 34: 329-356.